

CONTENTS

2-3 大阪ユニセフ協会第5代会長 吉田昌功さん
ボランティアが充実して活動できる場を

4-5 100号の節目に
平和を守り、気候変動を憂う



ユニセフチャリティバザーOCAT2025 売れ行き好調、賑わいの余韻残して

2025年10月25日開催

ユニセフを支援しようと個人や団体からご寄付いただいた品物が並んで、チャリティバザーが今年もOCAT ポンテ広場で行われました。当日、心配された雨も本降りにならず、会場はたくさんの来場者で賑わいました。販売には、ボランティアや大阪市スカウト隊のメンバー、大阪暁光高等学校の先生と生徒さんも応援に加わり、総勢53名が11時から15時まで対応に当たりました。各売り場は格安のお値段に次々と商品が売れ、概ね好調でした。お陰様で、バザーの収益金の全額715,056円を募金として送金することができました。品物をご提供くださった個人、ご協賛いただいた企業・団体の皆様に厚く御礼申し上げます。(ご協賛企業・団体名は8面に記載しています。)



大阪ユニセフ協会第5代会長 吉田昌功さん ボランティアが充実して活動 できる場を



よしだ よしのり
吉田 昌功

昭和27(1952)年3月、奈良県河合町出身。京都大学法学部出身。卒業後、近畿日本鉄道(近鉄)に入社。現在は近鉄グループホールディングス顧問。このほか、大阪商工会議所副会頭、大阪観光局評議員、奈良県人事委員会委員などを務めている。

大阪ユニセフ協会は来年、設立25周年になるのを前に、新会長に吉田昌功さんを迎えた。『大阪通信』100号の巻頭に、ユニセフへ寄せる思いを語ってもらった。
(河合洋成)

人生のあり方見つめた学生時代

——会長になられた抱負は？

吉田 ユニセフは世界の子どもたちの飢餓をなくすという大きな使命を持っています。飢餓は親から子ども、そしてその子どもへとつながる連鎖で、とりわけ貧困の連鎖がある。これを断ち切って、十分に食べられるようにしないとけません。このような意味でユニセフは重要であり、ボランティアの方々には敬意を表するばかりです。

20～30年前、街頭募金活動を見てユニセフを知った記憶があります。ユニセフの取り組みがもっと世の中に理解してもらえるよう、言わなくてもパッと分かるようにしたいと考えています。

——近鉄のご出身ですが、これまでにユニセフとのかわりがありましたか？

吉田 すみません。これまで特に直接かかわったことはありません。前会長の出田善蔵さんからの依頼で、大役を引き受けました。しかし、近鉄からは過去に会長(田代和氏)や事務局長(江並一嘉氏)も出ていますし、バザーの際には近鉄百貨店の物流倉庫を利用してもらっています。良いことは継続すべきであり、お役に立ちたい思いは強いです。

——ご出身は？

吉田 奈良の河合町というところですよ。両親は繊維関係の小さい工場を営んでいました。中学校は東大寺学園。最下位で入学したので周りの子の賢さにカルチャーショックを受けて、必死に勉強するようになりました。その反動か、高校ではロックバンドをしたり、ローリング・ストーンズを聞いたり。成績はさがりました。で

も、生徒会長をしていたのですよ。

——どんな仕事に就かれていましたか？

吉田 大学(京都大)卒業後は、地元に残ってほしいという親の希望もあり、近鉄に就職しました。若いころ、難波駅で2年ほど助役をしていた思い出が強く残っています。朝、駅に立っていたら女性から「ちかんがいる」と言われ、隣の日本橋駅まで男を追いかけて捕まえたり、夜は夜で、帰る途中の夜の世界の女性にからかわれたり、酔っ払いにからまれたりしたこともありました。ある意味、世間を垣間見る良い勉強になりました。

人との接触、コミュニケーションが好きになりましたね。もともと、「人生を豊かにしたい」と進学した大学では授業にあまり出ず、夜遅くまで友だちと話してばかりでした。相手の考えを聞いたり、語り合ったりすることで「人生のあり方」を見つめられました。いろいろ(個性的)な人がいて、今までとは別のカルチャーショックを感じ、自分の「地平線」があがったような学生生活でした。

人はコミュニケーションがないと生きていけないし、それに加えて友人、さらに実行する力が大事です。また実行するためには、友人の存在が大切だと思っています。

覚悟を持って向き合う

——趣味や特技はありますか？

吉田 実は焼肉が大好きです。若いときから、行きつけの店が天王寺にあって、一人で行っていました。昨年閉店してしまいましたが、昔を思い出します。行くたびに元気をもらっていました。周りから聞こえてくる話は



©UNICEF/UNI851516/El Baba

ガザ地区中部で、ユニセフが届けた栄養支援物資を口にしている子ども（パレスチナ、2025年8月7日撮影）

どうってことないのが多いけれど、中には仕事や生活上、参考になったものもありました。新しい店を探しているところですよ。

今は奈良の実家のメンテナンスをしていますので、週1、2回は帰って野菜づくりに精を出しています。ニンニクやピーマンを作っています。自宅で焼肉するときに使っていますよ。

——ところで話を戻しますが、世界の難民は今、1億2000万人を超えたとされています。こうした現状をどう見られますか。

吉田 「私たちに何ができるだろうか」と思います。世界には現実として「力が強いモノ」がいる。「力が強いモノ」は一方的に「弱いモノ」を攻撃してくる。何もできない虚しさを感じます。こうした現実をどう変えていくか。覚悟を持って向き合わないといけないと改めて認識しています。

それにしてもガザは酷いです。

——大阪ユニセフでは、25周年に合わせて振り返ったところ、2011年～24年に約4億円を寄付していました。かつては豪商たちの寄付で大阪が近代化した歴史も



あります。大阪の寄付文化はどう思われますか。

吉田 そうですね。積極的な企業もあり、偉大だと思います。寄付するためには利益がある。儲けてこそ寄付につながります。また、ユニセフはお金の管理が厳格で、信頼できる存在ですね。

誰もが元気になれる場所

——モットーは？

吉田 「人にやさしく、仕事に激しく、自分には厳しく」です。ずっと、これができたら良いなと心に刻んでやってきました。「情」は大切です。

——ボランティアと会員へのメッセージをお願いします。

吉田 ボランティアをされている方々は、仲間をつくってお互い刺激し、影響し合っている。日々成長されていることを実感していただければ、素晴らしいことだと思います。それぞれの方が充実して過ごせれば良いし、それができる環境を維持したい。また、若い人は仕事や収入の問題があるので難しいとは思いますが、差し支えない範囲でユニセフの活動をしてほしい。

ここユニセフに来たら誰もが元気になる。活力になる。力を合わせて一つになる。そこに価値があるのではないのでしょうか。

企業にも寄付を呼びかけていきますが、ボランティア活動がもっとも重要なことだと考えています。皆さんが、可能な範囲でボランティア活動に参加し、元気になっていただければと思っています。そうして大阪ユニセフの活動がますます盛んになることを願っています。